第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 矢ヶ崎 典隆 会員数 約530人)

T E L 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

今年度の「地理A」の出題は、地理の基礎的事項、国境を越えた世界の結びつき、ロシアと周辺諸国の地誌、世界の諸課題、地域調査と昨年同様5題の大問で構成された。問題数についても33問と昨年と同じであった。「地理B」に較べて大問で1題、全体で2問少なくなっている。また、4点配点の問題が1問みられた。「地理A」は「地理B」の簡易版という位置づけではないことから、問題数や4点配点の問題が適切であるかどうかは検討を要するところである。ただ、試験の難易度は概ね標準的であり、全体的に妥当であったといえる。また、主題図・グラフ・統計資料・景観写真を用いて多面的に地理的思考力を測ろうという設問形式は評価できるものである。日頃の地理学習の成果が試されるこのような形式の問題を今後も継続していただきたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 ここ数年、第1問目に地理の基礎的事項が出題されている。今年は図法、地形、気候などの自然地理分野が中心的に取り上げられた。他の大問以外のところで、基礎事項を取り上げようとすると、自然地理分野に偏ることは理解できる。また、人間生活を取り巻く環境の理解が基礎だということも理解できる。しかしながら、「地理A」では自然地理の単元はかなり薄いものなので、全体のバランスについても配慮をお願いしたい。

問1 図法に関してはメルカトル図法や正距方位図法などが取り上げられることが多かったが、今回はミラー図法となっている。学習指導要領では、「投影法に深入りしないこと」となっているので許容できる出題内容であろう。

問2 写真から撮影地点を選択する問題。このような出題においては素材の選択が重要となる。引き続き読み取りポイントが明瞭なものの出題をお願いしたい。

問3 常識的な内容だが、こうした出題も必要であろう。しかしながら、地図中に示された丸印が大きすぎ、複数の気候区にまたがる場合もあるので、迷った受験者がいたかもしれない。

問4 降水の説明である程度判別可能であり、標準的な出題である。短文には歴史的な視点も取り入れられている点も評価できる。

問5 短文中に「第四紀の～」といった表現が使われている。「地理A」の授業では自然地理分野は深入りしないので、このような地質的理解を問に含めるのは厳しいのではないだろうか。

- 問6 北海道や沖縄における地点情報をもとに解く。知識問題ではなく、緯度差などに基づく地理的思考力を求めているので、良問といえるだろう。
- 問7 時差あるいは経度・緯度の計算問題はしばしばみられるが、日没計算はあまり例がなく、目新しさを感じる。受験者も戸惑ったかもしれない。秋分の日であるとか経度差15度といった条件がきちんと示されているので、地理的思考方を問う問題に仕上がっている。
- 問8 水産資源とエネルギー資源分野をつなげて説明文を構成している。昨今、関心の高まっている時事的分野であるが、問題は常識的で平易であるといえる。
- 第2問 高校までの学習を基礎にした学力を問う良問がみられる。一方、7問中間2、問6、問7の3問が資料なしの問題である。単純に知識を問うこととなるこのような形式の問題は大問中1ないし2問が適当ではないか。特に、問6、問7は、同種の問題であり工夫が必要である。統計地図を使った出題が1問あればバランスが取れると思われる。
- 問1 日本ではなく中国を中心においていることにより、世界を相対化してみるという意図が感じられる。出題内容自体は難しくはないが、出題方法に工夫がみられ、良問といえる。
- 問2 基本的な内容で、問自体は適切。
- 問3 時事的な内容を問うており、データは受験者には初見であったと思われる。しかし、各国の経済状況や位置関係など高校までの地理学習で十分解答可能であり、良問といえる。
- 問4 このデータも受験者にとっては初見であろう。しかし、リード文に解答の道筋が示されており、高校までの学習で解答を導くことができる。良問といえる。
- 問5 国の経済力と面積の二つの条件を考えて解答する。4つの国の選択も適切。良問といえる。なお、①と②のグラフ表記（マーカーの形）は変えたほうが見やすい。
- 問6 問うている内容に問題はないが、出題方法に工夫が必要。
- 問7 問題内容、設問方法に工夫が必要。誤とする文の細かな部分に疑問がわく可能性がある。例えば、④の「関係諸国間の紛争が激しい」という部分がそれである。
- 第3問 ロシアと周辺諸国に関する問題。幅広い分野から出題されていることはもちろん、図表だけでなく絵や環日本海諸国図を用いるなど出題方法に工夫がみられる一方で、難問や歴史の知識に解答が左右される問題も含まれている。学習頻度が低いと考えられる地域でもあるので、難易度の検討を慎重にしていきたい。
- 問1 自然環境に関する問題。選択肢はいずれも教科書レベルの基本的な知識で判断が可能であり、平易な問題といえる。
- 問2 各国の自然環境と木材利用に関する問題。木材伐採高に占める針葉樹の割合が低いことから①はブラジルと判断できる。薪炭材利用の割合は経済水準とも関連する傾向があり、残った3か国の中では最も薪炭材利用の割合の高い②がロシアと判断できる。複数の視点から解答を導き出すという点では評価できるが、難問である。
- 問3 民族と生活に関する問題。教科書レベルの標準的な問題といえる。
- 問4 マトリョーシカに描かれた絵からヨーロッパロシアの文化とその背景について考えさせる問題。出題者側の工夫が感じられるが、正誤の判断は下線部の内容のみで可能で、マトリョーシカの絵に関して述べた文章がかえって判断を迷わせる印象がある。下線部の内容は教科書レベルであり妥当な内容である。

問5 18世紀の景観とその説明から都市を判断させる問題。地理選択者には「ヨーロッパの窓」という文章がヒントになる。歴史的背景を重視する意図は理解できるが、地理よりも世界史をしっかり学習してきた受験者が有利となりそうな問題である。

問6 極東地域と日本とのつながりに関する問題。環日本海諸国図を用いたのは興味深い、その図が生かされているとは言い難い。④は時事的な知識を要するものでやや判断には迷うが、そのほかの下線部はいずれも教科書レベルといえる。

問7 自動車の生産・貿易からみたロシアの経済に関する問題。日本からロシアへの中古車の輸出に関しては、授業で取り上げられる頻度も低くはないと考えられるが、②と③の判断はやや細かい知識を必要とし、迷った受験者も多かったのではないかと推察される。

第4問 世界の諸課題に関する問題である。大問のはじめに世界の諸課題について述べた文章があり、その中で下線が引かれている事項に関連したことについて、小問ごとに独自の出題がなされている。グラフや表、地図が一部で用いられており、標準的な問題といえる。

問1 地域別貧困人口の割合の推移について問う問題である。設問では、東アジア・東南アジア・オセアニアのものを聞いているが、これらの地域が経済の発展にともなって急速に貧困人口の割合が低下していることを理解していれば、それを示すグラフを見つけることは容易であると考えられる。貧困状態の変遷を経済状況の変化を考慮しながら解答させる良問であるといえる。

問2 各国の初等教育と識字率に関する問題である。設問ではインドの統計について聞いているが、インドでは小学校の設置が全国的に広がっているものの、出生率が高いため子供が非常に多く、また宗教などの影響から女性の識字率が低いことを考慮すれば正答を導くことができる。初等教育の問題について、人口・宗教などの問題を背景に考えさせる良問であるといえる。

問3 乳幼児死亡率の国・地域ごとの特徴について問う標準的な問題である。主な紛争や内戦を抱えている国、西アジアの非産油国の地図上の位置を押さえれば、統計地図の読み取りを誤らなければ容易に解答できる問題である。

問4 世界各地の環境の変化に関する標準的な問題である。キリバスで地球温暖化により海面上昇の被害が出始めていること、サヘル地域で過放牧・過耕作や薪炭採取によって土地の荒廃が進んでいること、タイで経済成長にともなって普及した自動車による大気汚染が広がっていることを押さえられれば容易に解答することができる。

問5 国際連合の専門機関であるUNESCO（国連教育科学文化機関）に関する問題である。UNESCOの活動について、教育・科学・文化についての研究・普及や国際的な情報交換を通して、世界の平和と安全への貢献を目指しているということ、特に、世界遺産の登録と保護を行っている機関であるということは常識といえよう。ただ、UNESCOそのものについて、高等学校の教科書等であまり扱われていないことに加え、地理的な問いになっていないので、問題として適切か疑問である。

第5問 例年と同じく最後の問題は地形図読図を中心に据えた地域調査的な内容である。金沢市という特徴が浮き彫りになりやすい地域を出題しているため、設問内容はいずれもオーソドックスなものとなっている。また、地図、写真、グラフ等についても標準的なものを多用してお

り、良問に仕上がっている。

問1 気温・降水量の年変化がとても明確に対比できる都市（金沢、長野、静岡）を題材にしている。適切な出題内容・出題方法であるが、やや易しすぎるかもしれない。

問2 空中写真の読図であるが、写真の中に地名等を適切に補充しており、設問を上手に誘導している。良問である。

問3 いずれも雪対策という観点で特徴を見抜くという問いかけである。雪国の受験者には有利だったであろう。④の写真は、やや難しい。

問4 地形図に断面図を組み合わせた出題である。特に断面図は出題にからめてとても工夫された表現がされている。適切な解説文とともに良問に仕上がっている。

問5 地形図と歴史地図を組み合わせた出題である。歴史地図は地形図と対比がしやすくなるように出題内容に従って、わかりやすく表現が工夫されている。良問である。

問6 地域調査の方法についてグラフと絡めた出題となっている。選択肢の文章も適切である。

3 ま と め

全体を通して出題内容、難易度等は概ね適切であったと思われる。しかしながら、以下の点については改善を望みたい。

- 1) 単純な知識や文章の正誤だけを問うている問題がみられた。
- 2) 地図や写真を用いながらも、解答に際し十分に利用されない問題がみられた。
- 3) 「地理A」の教科書や授業等で学習機会の少ない用語や事項を含んだ問題がみられた。
- 4) 他科目の知識に解答が左右される問題がみられた。

1)については、図や写真、グラフ等を用いて地理的な思考力を試すような設問形式を工夫していただきたい。もちろん、出題範囲、解答時間等を勘案すれば、一定数の単純な問いがあることはやむを得ない。しかし単純な問いであっても、地理の問題としてふさわしい問いになっているか、レベルは適切かといったことを検討してほしい。2)については、純粋に図や写真から読み取れることを問うなどの改善をお願いしたい。これらについては、従前から指摘していることである。3)・4)については、どのような出題内容が「地理A」の問題としてふさわしいのか、検討をお願いしたい。また、「地理」全体にいえることであるが、写真がやや不鮮明なものがみられる。費用の関係もあろうが、教科書の多色化が普通となっている現状において、写真のカラー化についても是非とも考えていただきたい。

地 理 B

1 前 文

平成25年度の入学生から実施される新学習指導要領では地理的スキルが重視され、地図、グラフ、写真、衛星画像等を交えた学習が増加する。こうした学習には従来の方法に加えて、コンピュータ等を使ったものが入ってくる。学習者（生徒）が「何を覚え、何を理解するのか」といった思考そのものも変化する可能性もある。これらを題材にした入試問題もその整合性が求められるよう。特に、地理では地図を活用した出題が多く求められているが、地図についての考え方は先端技術の進歩に強く影響を受けて変化している。地図を用いた出題には特に注意が必要である。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 世界の自然環境に関する問題である。世界地図やグラフといった資料を活用した出題である。小問ごとに独自の出題がなされている。冬季の降水量と平均気温、世界の海水温の分布、貿易風の風向、熱帯低気圧の特徴、地形、土壌と植生について幅広く聞いているが、知識を単純に聞く問題が多く見られる。問題形式としては標準的といえる。

問1 ウラジオストク、ヴァンクーヴァー、ボストン、ダブリンの年降水量に対する冬季3か月（12～2月）の合計降水量の割合と、冬季3か月の平均気温との関係についてグラフを読み取る標準的な問題である。図は見慣れないものであると思われるが、冬季の気候の特徴を、東岸・西岸の違いや風、海流などを含めて考えさせる良問といえよう。

問2 世界各地の海水温の分布に関する標準的な問題である。2月海水温の分布を示した世界地図（等値線図）を正確に読み取れば容易に解答できる問題である。選択肢の1つにエルニーニョ現象について述べているものがあり、世界地図とは関連性が薄いものとなっているが、この現象自体は高等学校でも学ぶことであるので問題はないと考えたい。

問3 貿易風の風向に関する問題である。貿易風の北半球と南半球の風向きを組み合わせで解答するもので、難易度が低く、単純な問題だと考えられる。基本事項を確認する問題は必要ではあるが、もう少し工夫されてもいいのではないかと感じる。

問4 熱帯低気圧の特徴について問う標準的な問題である。熱帯低気圧の動きや各地の呼称、発生数の特徴、熱帯低気圧がもたらす降水について基本的なことを聞いている。熱帯低気圧の発生は、海水温が高い夏に多く、海水温が低くなる冬に少ないことをわかっていれば容易に解答できる。

問5 モルディブ、ハワイ、大西洋中央海嶺の地形に関する標準的な問題である。モルディブが環礁の島々であること、ハワイがホットスポットであること、大西洋中央海嶺がプレートの広がる境界であることを知っていれば容易に解答できる。3地域は世界地図に示されているため、地名を知らなくても十分解答できるようになっている。大地形とサンゴ礁地形に関する基本的な問題といえる。

問6 アメリカ合衆国中央部に広がるプレーリー土に関する問題である。プレーリー土は黒海北岸から西シベリアに広がるチェルノーゼムと同様、腐植を多く含んでいることから黒色を

呈していることを理解していれば容易に解答できる。なお、近年学術的には、FAOおよびUSDAの土壤分類・名称がつかわれるのが一般的であるが、教科書等で用いられているものはこれらと若干の違いがあり今後検討が必要と思われる。

第2問 グラフや図表の読み取りを通して地理的な思考力を試そうとする設問形式は評価できる。ただ、それが十分に活用されていない問題や、用語の意味が理解しにくい問題がみられたことは残念である。地理Bでの学習内容をふまえた、適切な問題を作成していただきたい。

問1 グラフを用いる設問形式は望ましいものではあるが、グラフを見なくても文章を読めば、解答できてしまう。グラフが設問に活かされていない。問い方にもう少し工夫がほしい。

問2 単純な知識を問う問題である。アンデス地方の農業については学習の機会が少ないと思われるが、常識的に解答可能で入試問題としてはやや疑問がある。

問3 統計地図の読み取りという形式は適切であるが、地理Bの学習内容からみて、配合飼料の工場分布を問うのが適切かどうか疑問である。

問4 受験者にとって初見の統計と思われるが、バイオ燃料はアメリカやブラジルで導入が進んでいることと1人当たり1次エネルギー供給量から判断できる。難易度は高くはない。

問5 教科書レベルの知識であり、基本的な問題である。

問6 海外直接投資の「純流入額」の意味が理解しにくい。この用語の理解に戸惑った受験者も多かったと推察される。注釈での補足説明が必要なのではないか。

第3問 写真、地図、表が活用されている問題が多く好感が持てる。文化を問う場合、知識を問うだけの問題になる傾向があるが、大学入試としては一定数の出題は必要であろう。形式的なことがらであるが、図1を参照する問題の配置に工夫が必要ではないか。

問1 基礎的な知識を問う問題である。地図上の位置を答えさせる方法は地理の問題としてふさわしい。

問2 基礎的な知識を問う問題である。問2は国名を問うことで問1との差異をはかっている。同種の問題ではこのような工夫が必要であろう。

問3 地域の自然環境とのかかわりを考えるという地理で重視される視点に立った問題であり、良問といえよう。写真はカラー印刷にしてほしい。

問4 読図力を問う問題で、レベルは適切。細かなことになるが、凡例は再考してほしい。1804年、2007年とも市街地内部にも耕地その他が散見される。広場や駐車場などが考えられるが、耕地と市街地内部の土地利用が同一の凡例になっていることに疑問がある。

問5 地理用語に関して基本的な知識を問う問題。設問の仕方も悪くはない。

問6 近年話題となっているフードデザートを取り上げた意欲的な問題で敬意を表す。しかし、解答に当たっては、表の読解を必要としないように思える。工夫が必要。

第4問 学習頻度の高いと考えられる中国に関する問題。自然環境、牧畜、経済、貿易、生活、世界に広がる中国系住民と幅広い分野から出題されている。学習機会が多い地域であることから受験者にとっても解きやすいものであったと考えられる。問題のレベルも標準といえる。中国のようなマスメディア等でも取り上げられる機会が多い地域に関しては、常識の範囲で解答が可能にならないように、問2、4のような複数の知識を組み合わせる問題を特に意識し

ていただきたい。

- 問1 中国の自然環境に関する問題。選択肢はいずれも教科書レベルの基本的な内容であり、判断に迷った受験者は少なかったと推察される。
- 問2 家畜の生産に関する問題。主題図を利用した地理らしい問題となっている。自然環境と宗教の複数の知識を組み合わせで判断する問題であり、地理的な考え方が試される良問。
- 問3 学習頻度の高いと推察される中国の経済格差に関する問題。階級区分図を利用して地理らしい問題にしようとする工夫がみられるものの、一人っ子政策に関する知識だけで正誤の判断は可能であり、図が生きるような工夫が欲しい。また、図には三つの自治区の場所が書かれているが、これらの自治区は頻出であり、高校で地理を選択した者にはこれくらいの地名は知っていて欲しい。したがってこの配慮は親切すぎるのではないか。地名知識に偏りすぎるのはよくないが、バランスを再検討していただきたい。
- 問4 中国の貿易に関する問題。中国の経済発展の過程を考慮しながら図の読み取りを行う地理的な判断力が試されている。出題された三つの貿易品も妥当であり良問といえる。
- 問5 中国の生活の変化に関する知識を試す問題。常識の範囲で解答が可能な易しい問題である。大学入試のレベルとしては疑問。
- 問6 世界の中国系住民に関する知識を試す問題。正解の②について、イタリアにおける中国系移民を学習する機会は少ないと考えられるが、その他の選択肢は各地域の地誌でも扱われる頻度は高いと推察され、標準レベルの問題といえる。

第5問 最初に問題文を配置し、読ませてから各問に移るように構成されている。近年センター試験ではリード文のある大問が減少しているが、「現代世界の諸課題」のように、課題を総観的に理解するためにはリード文は有効であろう。問1や問2では地球的課題に対する出題というよりもその背景にある地理的知識を問うている。無論、それも重要であるが課題自体を問うても良かったのではないだろうか。またこれまで、地球的課題の大問では、グラフや表の読み取り問題が出題されてきたが、今回は出題されていない。受験者の多様な力を評価するためにも、資料を用いた問い方もお願いしたい。

- 問1 アフリカ中部の現況について出題している。説明文の内容は現代的課題だが、訴求点がサバナヤルワンダという植生や国名であり、単純な知識を問う問題となっているのが残念である。
- 問2 「危機にさらされている遺産」を取り上げたのは目新しく感じる。ハリケーン、イラン高原ともに標準的なレベルの出題である。
- 問3 説明文の導入として写真を用いたのは良いアイデアである。しかし、解答に当たって写真は使われていない。もう一工夫必要であると思われる。旧ユーゴスラビア（バルカン半島）の宗教については、世界史でも扱うがやや難であろう。
- 問4 コスタリカがエコツーリズムを早い段階で導入したことは、比較的知られているが、授業で扱うことは少なく、受験者には難しかったであろう。しかしイタリアとオーストラリアについては短文と容易に結びつけられるので、結果として平易となっている。
- 問5 酸性雨に関する一般的な内容を短文正誤でたずねている。誤文はラムサール条約なので、正解は明らかであり、平易といえる。地理的な問いになるよう一工夫が必要であると思

う。

第6問 例年と同じく地理A地理Bのそれぞれの最後の問題は地形図読図を中心に据えた地域調査的な内容である。金沢市という特徴が浮き彫りになりやすい地域を出題しているため、設問内容はいずれもオーソドックスなものとなっている。また、地図、写真、グラフ等についても標準的なものを多用しており、良問に仕上がっている。

問1 気温・降水量の年変化がとても明確に対比できる都市（金沢、長野、静岡）を題材にしている。適切な出題内容・出題方法であるが、やや易しすぎるかもしれない。

問2 空中写真の読図であるが、写真の中に地名等を適切に補充しており、設問を上手に誘導している。良問である。

問3 いずれも雪対策という観点で特徴を見抜くという問いかけである。④の写真は、積雪のない地域の受験者にとっては実感がわきにくくやや難しいかもしれない。

問4 地形図に断面図を組み合わせた出題である。特に断面図は出題にからめてとても工夫された表現がされている。適切な解説文とともに良問に仕上がっている。

問5 地形図と歴史地図を組み合わせた出題である。歴史地図は地形図と対比がしやすくなるように出題内容に従って、わかりやすく表現が工夫されている。良問である。

問6 地域調査の方法についてグラフと絡めた出題となっている。選択肢の文章も適切である。

3 ま と め

全体としては、内容、レベル、分量とも適切であると判断する。また、全体を見る場合には次のようなバランスも重要な観点と思われる。

- 1) 出題の形式的なバランス…地図・写真・統計表・グラフなどを利用した出題、文章のみによる出題など
- 2) 解答方法のバランス…4択一、3つの組合せ解答、2つの正誤組み合わせ解答など
- 3) 見慣れない内容の出題と定番の内容の出題など
- 4) 解答までの多くの思考ステップを踏む必要があるものとその必要がないものなど

1)については地理という科目の特質であることとの関係で不可欠、2)については、同じような解答方法が続くことによる類似な思考パターンの回避、3)地理の学習の基本が身につけている者にとっては見慣れない内容の出題でも問題はない、4)多くの思考ステップを踏むため、解答にそれなりの時間がかかるような出題であっても大学生としての必要な知識・思考力の基礎を測るには何問かは必要である、というようにこうしたバランスについては大学入試センター試験では、十分に考慮に入れての出題が望ましいと考える。今回の追・再試験地理Bにおいては、これらについても良い出題であったと思われる。地理の本質的な能力を測る最も基本の試験として大学入試センター試験にかかる期待は極めて大きい。図表を多用するような出題を多くしたり、全体的なバランスを考慮したりと作問における労力は極めて大きいと思われるが、今後とも良い問題が出題されることを望む。

② 全国地理教育研究会

(代表者 遠藤文雄 会員数 約500人)

TEL 0422-46-4181

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年一回の研究大会と年二回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の問題には強い関心を持っている。毎年、センター試験の実施後には検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行っている。今回も、その場でも出された声をまとめ、本会の意見・評価としたい。

2 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度のセンター試験追・再試験は、地理A・地理Bともに、本試験と同様に難易度が高かったが、本試験と比較すれば、学習の成果を問う適正なレベルに近かったと考えられる。小問単位で見ると、本試験と同様に概ね、「高等学校までの地理の学習の成果を適切に問うている」といえるが、中には、知識が相当程度あることを前提に作問されている問がみられる。難しい課題ではあるが、とくに地理Aについては、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや資料活用、思考判断など、地理的技能や見方・考え方を求める設問を増やしながら、受験者の学力や常識のレベルをより正確に見極め、思いがけず難問になるということがないように作問する努力を強く求めたい。また、初見の図表・グラフの読み取りに時間を要すること、「組合せ選択」の小問が多数みられることなどの要素が加わって、歴史や公民科目と比べ高得点が取りにくい状況にあることは、追・再試験でも変わりはない。

(2) 設問数や形式について

大問数は地理Aで5問、地理Bで6問と昨年度や本試験と変わらず、小問数も同様に地理Aが33問、地理Bが35問であった。また、大問の構成でも、昨年度や本試験と変わりなかった。

問題の形式については、①「組合せ選択」の設問が引き続き、特に地理Bで多く出題されている、②地理A・地理Bともに図表が多用されている、などの指摘があった。①については、地理Aでは6問が、地理Bでは8問が6択の「組合せ選択」である。これは地理Aでは昨年度より減少したが、地理Bではほぼ同数であった。ただし、この他に、2本の下線部分の正誤をそれぞれ判別するなどして4択となる「組合せ選択」の小問が地理Aでは1問、地理Bでは5問みられた。②については、地理A（地図7、地形図2、図7、表2、写真3、絵・イラスト2）、地理B（地図10、地形図2、図6、表2、写真3、絵・イラスト1）で、例年通り図表の読み取りを問う設問が多くみられた。これは、地理という科目の特性でもあり、適切な地図や図表を用いることは地理的技能で基本的には歓迎したい。ただし、情報を盛り込みすぎたり、作りすぎて読み取りにくくなったりするなどの課題がないように精査を願いたい。

3 「地理A」について

地理Aとは何か、地理Aらしい設問とは何かをかなりの確に捉えて作問されている小問もみられるが、地理Aの学習レベルの理解が不足している小問も多い。現状、2単位の授業で扱える内容はかなり限定されたものとなっている。義務教育段階での社会科の学習内容も、知識レベルではきわめて薄い。その中で追・再試験でも、出題範囲としては適切でありながらも、地理Bとのちがいが明確でない「知識を前提とする」設問が目立ち、昨年度追・再試験でみられた、生活・文化色の強い地理Aらしい大問が今年度は見当たらなかった。本会で出た指摘を参考にいただければと思う。なお、問題の程度は、本試験同様平均点は低いと予想されるが、難易度が高かった本試験よりは適正ではないかという印象であり、追・再試験が本試験として用いられた方が良かったのではないかとの声も聞かれた。

第1問 「地理の基礎的事項」 追・再試験の「地理の基礎的事項」の大問は、例年と大きく異なった本試験とは異なり、これまでとほぼ同様の形式であった。しかし本試験ほどではないにせよ、昨年度までと比較して、基礎的とはいえない内容や、解答に時間がかかるものが含まれている。自然環境や地図に関わる内容であれば基礎的事項であるかのような大問の構成となっており、「地理の基礎的事項」の大問の作成には、再検討の余地があると考えられる。

問1 ミラー図法に関する問。内容、難易度ともに「地理の基礎的事項」に相応しい。

問2 造山帯等の違いによる山容の相違を判別する問。写真に付された文がないこと、キリマンジャロに関する知識を単純に問うていること、写真も決して鮮明なものとはいえないこと、などから難易度が高く、再考の余地がある問である。

問3 植生に関する平易な問。

問4 雨温図などのグラフを用いずに気候について問うもので、難易は標準的。工夫された問であるが、「地理の基礎的事項」の問としては問題を作りこみ過ぎている。

問5 オーストラリア大陸の自然環境に関する平易な問。「大規模な」という曖昧な表現が含まれる文が正解となっている点が気になる。

問6 日本の気候に関する問で、センター試験に相応しい問と評価できるが、様々な要素が入れ込まれており、「地理の基礎的事項」よりもその他の大問に相応しい。難易は標準的。

問7 工夫がみられる時差の問。この問は、「地理の基礎的事項」に相応しい。難易は標準的。

問8 海洋資源の開発と利用に関する問。平易な問であるが、海面養殖が水産業全体でどれくらいの割合を占めているかを問う部分は、基礎的とはいえない。

第2問 「国境を越えた世界の結びつき」 「知識を前提とする」設問が目立ち、正答率も低かったと考えられる。また、国境を越えた結びつきを扱う大問にもかかわらず、地図を資料として用いる問が、追・再試験では一つもみられなかった。知識の有無に特化せず、資料の読み取りや活用、思考判断など、地理的技能や見方・考え方を求める設問の増加を望みたい。

問1 中国とアメリカ合衆国、日本、EUとの貿易に関する流線図から国名・地域を判別する問。アメリカ合衆国から中国への農水産物輸出が多いことは容易に読み取りが可能であるが、中国からEUへの工業製品輸出の輸出額が、日本に対してのものより圧倒的に多いことを判断できなければ正解を得られない正答率の低い問である。既習の学習内容を応用すれば

問えるという判断が誤っている問といえる。

問2 平易な文選で、この程度のレベルの問がもっと増加してもよいのではないか。

問3 アメリカ合衆国と各国とのつながりを背景に各指標の判別を求める問で、難易は標準的。良問と評価したい。

問4 書籍類の輸出という指標に惑わされなければ、平易な問。

問5 各国の国際線、国内線航空輸送量の推移に関する問。オランダとインドの判別は平易でも、韓国とカナダの判別は難しい。問1とともに検討の余地が残る。

問6 船舶輸送についての問。「いくつかの」、「主要」、「上位」、「巨大」、「多い」など、正誤を判断しづらいことばが多く用いられた文選で、再考の余地がある。

問7 陸上輸送について通常の学習では扱われないような細かな内容が多く含まれた文選で、やや難。これも評価しがたい問。

第3問 「ロシアおよびその周辺諸国」 地理Aを意識した作問の姿勢は何えるが、「南アジア」を扱った本試験ほど完成度は高くない。

問1 自然環境と人間活動に関する文選で、難易は標準的。内容や誤り方を含めよく完成された問として評価したい。

問2 森林や木材に関する問。地理B的な問ではあるが、センター試験らしい問で、難易は標準的。

問3 民族に関する問で、難易は標準的。図中の地域の示し方に疑問は残るが、内容や問い方は地理Aらしく仕上がった問。

問4 ロシアでみられる人形に関する平易な問。「フランスからの移入」など、単独で正誤を判断するのが困難な文が含まれている点は気にかかるが、地理Aらしい問にはなっている。

問5 サンクトペテルブルクに関する問。問に添えられた絵画よりは、参考とする前出の地図をもとに、絵画の説明文に加えられた「ヨーロッパの窓」でその位置を判断する問。意欲的な力作であることは評価できるが、「ヨーロッパの窓」だけで判断を求めるのは難しい。

問6 日本とロシアの結びつきに関する問。パイプラインが「完成した」かどうかの詳細な知識が正解となる文に含まれており、やや難。工夫された地図が用いられているが、問の内容そのものにはあまり生かされておらず残念。

問7 自動車に関する問。「グラフの読み取り」と設問にはあるが読み取りはなく、その背景に関する正誤の判断を問うものとなっている。

第4問 「世界の諸課題」 リード文が用いられたが、各設問に生かされておらず、読んだだけ時間を取られるものとなっている。このようなリード文には必要性が感じられない。内容的には諸課題の分野が限定されており、開発に関わる問が続いている。

問1 グラフを読み取って地域を答える問で、標準的な問。貧困人口の割合と人数が示されているなど、資料から読み取って判断させようとする良問となっている。

問2 教育に関する指標から国を判別する問。難易度は高いが、各国の相違をもとに判別して正解を導き出せる良問となっている。

問3 5歳未満児死亡率に関する図の読み取りではあるが、世界地図で産油国イラン、イラクの位置を把握しているかどうかを問うており、地理Aの問としてはやや難。

問4 環境の変化に関する平易な問であるが、誤りの文が苦しい。

問5 各国際機関の取り組みに関する問で、内容的には平易。「政治経済」的な問。

第5問 「金沢市の地域調査」 本試験同様、比較的狭い範囲内からの内容の出題に終始した大問であるが、作問への工夫が大いに感じられ、狭い範囲からの出題であることによる仕上がりの悪さはあまり感じられない。資料として用いられたグラフや地図などをもう少し生かすことができれば、さらに仕上がりの良い大問となったと思われる。

問1 雨温図から地域を判別する定番の問で標準的な難易。地域の選び方も上手く出来ている。

問2 河口付近から北東方向に流れ出る土砂を、写真から読み取れるかどうかの問で平易。形式に関しては、何のつながりもない二つの事項に関してそれぞれの正誤を求める「組み合わせ選択」には、違和感がある。

問3 気候に対する家屋の工夫に関する問で平易。正解となる、「隣家との境界に張り出した壁」の役割が不明である点は、再考の余地がある。

問4 金沢市内の用水に関する問。工夫を凝らした意欲的な問と評価できるが、読み取りに時間がかかる割には、平易な問。問の解答には直接影響しないが、「逆サイフォン技術」ということばが何の説明もなく使われている点が気になる。

問5 金沢市中心部の変化に関する問。新旧2枚の地図を使った大掛かりな問ではあるが、内容は平易な読み取り。

問6 観光に関する平易な問。資料として用いられたグラフが、読み取りには全く必要がない。

4 「地理B」について（地理Aとの共通問題を除く）

本年度の追・再試験地理Bは、本試験に見られたような判別に迷う統計資料も少なく、本試験よりも高得点を取りやすいものとなったと考えられる。追・再試験の平均点は公表されることがないとは言え、本試験と追・再試験との難易度の大きな差は改善していただきたいが、日本史や世界史と比べ90点以上の高得点者の分布が少ない現状を考えれば、本年度の追・再試験程度の難易度での調整をお願いしたい。地理A以上に、追・再試験が本試験として用いられた方が良かったのではないかとの声が多かった。

第1問 「世界の自然環境」 本試験と同じく平易な取り組みやすい問が続き、出だしとしては歓迎すべき大問。人間生活との関連がほとんど問われていない点も、本試験と同様であり、改善をお願いしたい。

問1 年降水量に関する問で、追・再試験地理Aと同じく雨温図でもハイサーグラフでもない統計資料を用いた設問。出だしの小問としては、より難易度の低い問が相応しいと考えられるが、問そのものとしては良問と評価したい。

問2 海水温の分布に関する図を有効に使った読み取り問題で、単なる読み取りでも単なる知識問題でもなく、問1に続く良問。

問3 平易な貿易風に関する問で、地理Aの「地理の基礎的事項」に相応しい。

問4 平易な熱帯低気圧に関する文選であるが、正解となる文の誤り方は苦しい。

問5 地形に関する易問。

問6 問3と同じく平易な土壌と植生に関する問で、地理Aの「地理の基礎的事項」に相応しいが、こうした平易な問が一定数みられることは歓迎したい。

第2問 「資源と産業」 資源と産業の大問であるが、第1次産業と第2次産業からバランスよく出題されている点を、大いに評価したい。難易度も高くなく、第1問に続いて取り組みやすい評価できる大問である。

問1 プランテーションに関するグラフの読み取りとその背景に関する正誤問題だが、図を読み取る必要がなく文だけを読めば即答できる易問。

問2 穀物の生産や流通に関する平易な問。正解となる文の誤り方に工夫が欲しい。

問3 製造業の立地に関する定番の問。砂糖を原料作物と、配合飼料を家畜飼育とそれぞれ関連付けて考えることで正解を得られる工夫された問で、良問と評価したい。

問4 正解となるブラジルについては、1次エネルギーに関する指標だけで正解を得られるので正解率は高いが、ドイツとフランスの判別は難しい。

問5 輸出加工区に関する平易な問。

問6 海外直接投資の純流入額に関する問。「海外直接投資の純流入額」ということばについて理解できれば平易な問であるが、このことばをどれくらいの受験者が理解しているのか疑問。

第3問 「生活文化と都市」 本試験と同様、A都市と村落、B生活文化とに分けられて出題されなかったが、出題分野としてはほぼ同様の問。詳細な内容が含まれたり、改善の余地が残されたりする問が多くみられ、完成度としてはあまり高くない大問となっている。

問1 馬乳酒、ナン、ナムプラーをそれぞれ知らなくとも、馬、小麦、魚を振り所に正解を導き出せる良問であるが、地理Bよりも地理Aに相応しい問。難易は標準的。

問2 宗教に関する平易な問であるが、詳細な内容が扱われている文もあり、検討の余地がある。

問3 石、植物、土を振り所に住居の見られる地域を判別する難問。扱われることがあまり多くない住居ではなく、扱われることが多い住居での出題が妥当。

問4 都市の変化に関する問で、図中にみられる駐車場の記号を読み取れば誤りを判断できる平易な問。新旧2枚の地図を用いた意欲的な問だけに、正解に関する部分が単純なことが惜まれる。

問5 先進国の都市に関する平易な文選。

問6 注を含め表に対しての説明が大掛かりで、表の理解に時間を取られるにもかかわらず、誤りは表とは関係のない点であり、悪問と評価したい。

第4問 「中国」 中国地誌に関する大問。本試験と同様に、地理Bの地誌分野の大問として非常にオーソドックスなもので、受験者としては安心して取り組めた小問が多かった。

問1 自然環境に関する易問。

問2 シンチヤンウイグル自治区の羊と豚、内モンゴルの羊以外に判断の根拠となるものはなく、牛を判別する基準となるものがない。平易な問ではあるが、残されたものが牛であるという作りは完成度が低い。

問3 各地の肉類の生産に関する問。図からの読み取りではなく、一人っ子政策に関する文の内容で誤っており、この問も図を読み取らなくとも正解を得られるものとなっている。

問4 貿易品目の輸出入額と品目に関する問で、センター試験らしく仕上がった良問。

問5 平易な問であるが、各文中の生活の変化が中国で実際に起きているかどうかを、それぞれ判断することはできない。日本での生活から類推して誤りを選択することになる問で、悪問としたい。

問6 標準的な難易の問であるが、誤文の誤り方にもう少し工夫が欲しい。

第5問 「世界遺産にかかわる現代世界の諸課題」 世界の諸課題を世界遺産に関連させて作られた大問で、積極的な工夫の跡がみられるが、地理Bよりは地理Aで扱った方がより出来の良い大問となったのではないか。内容的には、民族と環境に問が集中している。限られた分野からではなく、様々な課題からの出題が望まれる。

問1 平易な問ではあるが、形式的には追・再試験地理A第5問の問2と同じく、何のつながりもない二つの事項に関してそれぞれの正誤を求める「組み合わせ選択」であり、違和感がある。

問2 図中Pはカリブ海にあることは確かであるが、ハリケーンの常襲地帯かどうかは判断しづらく、難問である。二つの項目で正誤をそれぞれ求める形式は、相当に明らかな正誤を問う場合に限って用いられるべきではないか。

問3 ヨーロッパの宗教分布に関する易問。写真が用いられるなど、問題の作りに工夫は見られるが、写真はまったく生かされていないのが残念。

問4 観光に関する問で、それぞれの文中に地域を容易に特定することができる語句が散りばめられており、標準的な難易の問。

問5 酸性雨に関する問。酸性雨をラムサール条約で誤っており、もう少し工夫が欲しい。

第6問 (地理Aと共通)

5 要 約

追・再試験の地理A・地理Bを小問単位で検証した結果、本年度も、本試験と同様に大多数の問はこれまでと同様に、高等学校までの学習内容に概ね沿った設問であり、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。この点は高く評価したい。また追・再試験は、地理A・地理Bともに、本試験よりも難易度も低く、特に地理Bでは、全体にみれば受験者の学習の成果を発揮しやすいものであったと評価できる。ぜひ来年度は、本試験・追・再試験の地理A・地理Bともに、少なくとも本年度の追・再試験地理Bの水準に達した問題の作成をお願いしたい。

一方で、知識理解に偏った設問が少なからずみられることは、例年通りの課題である。知識を学ぶ学習がこれまでより一層減っている現状では、知識を前提とする設問にはより深い配慮をお願いしたい。そして、先生方相互のチェック機能を十分に働かせて、学習範囲の確認をしっかり行っていただきたい。作問される先生方の想像以上に受験者の常識レベルは薄く、授業内容は言葉としての理解に留まってしまっていることを、われわれ現場の教師は日々感じている。

本会は例年、(1)基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、(2)授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で

諸説あるような内容を安易に出題しないこと、(3)専門性の高い作問者の常識と受験者のそれとの落差に留意すること、(4)解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしている。本会は学習の成果を踏まえた設問であれば難問でも評価する。今年度も作問者のご苦勞は十分感じ取れた。次年度以降もわれわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。

なお本会では例年多くの先生方から、追・再試験を非公開にする理由がわからない、という声があがっていたが、本年度は追・再試験の公開が行われた。来年度以降も、追・再試験を本試験同様に公開して、実施後すぐにより多くの関係者からの評価を受け、よりよい作問へ向けて取り組んでいただくようお願いしたい。